

研究員の主張

グリーンツーリズムの概念

資源を生かし、安らぎの農村景観に

～異分野の人々がネットワークし地域ぐるみで～

荘銀総合研究所
石川 敬 義

本県でグリーンツーリズムが政策課題として取り上げられて五年が経つ。農家の間でもようやく実践する人が増えはじめ、関心を寄せる人も多くなっている。しかし、中には「農業からみればグリーンツーリズムは邪道」とか「グリーンツーリズムをやっててももつからない」などの声も聞かれる。事業性の面から本県のグリーンツーリズムを点検してみたい。

各地で創意工夫の成果

庄内地方ではグリーンツーリズムの実践者たちのネットワークができたし、内陸地方では温泉旅館と農家との連携で新たな誘客マーケットを開拓しているところがあり、最上地方の過疎化が進んだ中山間では集落を挙げて取り組んだ結果、活力に満ちた集落に様変わりしたところもある。スローな変化ではあるが、県内の農村が変わりはじめており、グリーンツーリズム運動は着実に成果を挙げていく。山辺町作谷沢地区では夫に先立たれて独り暮らしを余儀なくされた主婦が民宿を始め、別人のように元気になっており、グリーンツーリズムの効用を象徴する事例と言える。囲炉裏がある住宅だったため、これを復活させて団らんの場とし、何回も訪れる固定

客も出てきた。客が多いときには地域の独り暮らし老婦人が手伝いに駆けつけ、注文があれば地元のソバ打ちグループが、そこを訪れなければ食べられないおいしい味を提供する。作谷沢地区のこの事例の特筆すべき点は、高齢の独り暮らしの女性を支援し、地域の人々が応援団を組織し民宿営業の許可の手続きなどを行い、地域を挙げて交流に取り組んでいることである。グリーンツーリズムを地域活性化手法として生かす独特の取り組みである。

もう一度、理念に戻って

ところが一方で、「グリーンツーリズムはもつからない」といった類の誤解も生まれている。本県のグリーンツーリズムは理念を脇に置いて、方法論から入った面があるので致し

方ないのかもしれない。グリーンツーリズムはヨーロッパで定着しているが、「グリーン」とは農村、自然、景観などを指し、「ツーリズム」とは観光、旅行を指す。つまり、農村を開放して観光の場にするのが目的である。ところが、わが国ではドンチャン騒ぎなどの憂さ晴らしや刺激を求める観光が長い間続いたせいもあって、そのような観光イメージが染み付いており、「観光」に対するアレルギーが強い。しかし「観光」とは本来「国の光を観る」(易経)という意味であり、「国づくり」「地域づくり」そのものである。光を放つ魅力的な地域づくりをしてはじめてツーリストを呼び込めるのである。住んでいる人々が光を放つ地域づくりをしていることが求められるのであり、単なるよそから人を呼び込むことではない。全国各地でグリーンツーリズムが行われていて誘客合戦が厳しくなっているが、最終的には地域の個性に磨きをかける競争になるはずである。どんな農村づくりに取り組んでいるかが問われる。農村は、憂さ晴らしや刺激を提供する場ではなく、安らぎ、景観の美しさ、静かさ、潤いある暮らし、味わい深い文化、充実した暮らしなどを提供する場となるべきである。訪れる側も受け入れ

(表1) グリーンツーリズムを取り巻く条件の日欧比較

	日 本	欧 州
農家の主婦の役割	農作業の重要な担い手	農作業に従事しない
農業経営	生産が中心	経営を多角化
旅行者と農場	農場に入れない	農場を一般に開放
景観	景観形成に熱心でない	景観形成に熱心
情報発信	行政が中心になり発信	民間と農家が発信
ガイド・インストラクター	ボランティア頼み	専業者もいる
国民の余暇活動	長期休暇がとれない	長期休暇がとれる
農家側のサービス	至れり尽くせり	旅行者の主体性を尊重
制度	既存制度が推進を阻む	やりやすく制度を改変
推進母体	行政	民間
国民のライフスタイル	刺激志向が残る	安らぎ志向が強い

る側も、従来の日本の観光観よりも質の高いものを求めるのである。

農業収入を補完する機能

欧州と日本とは(表1)に示すように、グリーンツーリズムを取り巻く条件は大きく異なり、実践には障害が多い。しかし、一度にどつと大勢の人が訪れることはグリーンツーリズムの考え方に合わないのは日本も欧州も同じであろう。農業のかたわら客を受け

(表2) 農村側のグリーンツーリズム推進方向

資源	「農」を中心とした「食」、地域の文化、自然などの価値を見直し、都市の人々との交流資源にする
景観	日本の伝統的な風景を保全し、訪れた人に懐かしさ、心の安らぎ、癒し、感動などを提供する
交流	都市の人々を受け入れ、農作業、自然、地域文化に触れる体験を通し、楽しさや感動を提供する
宿泊	空き部屋、別棟の住居を宿泊用に開放し、安価な料金で長期滞在できるようにし、リピーターを確保する
所得源	宿泊料金、体験指導料、食材販売等の収入を確保することによって農業収入を補う
活性化	農村地域を開放し上記の取り組みを行うことによって、農村の人々が生き生きと暮らし、活力に満ちた地域にする

入れるのであるから、農業の支障にならないよう少しずつ切れ目なく訪れてもらうべきであり、そのための工夫をする必要がある。また、欧州では農家民宿を行っている農家の収入は三本柱で構成されている。一つは農業収入、二つに直接所得補償(デカップリング)収入、三つに民宿経営収入や体験指導料収入である。それぞれの収入がおおよそ三分の一ずつを占めるのが一般的である。わが国でも今年から直接支払制度がスタートしたことで、ようやく欧州並の条件が整いつつある状

況になってきた。グリーンツーリズムでもうけるのではなく、農村資源を生かすことによって農家経営を多角化し、伸びない農業収入を補うのが本筋であろう。日本では作目を複合化して所得を増やすのが主流であるが、埋もれた資源を生かし経営を多角化するのがグリーンツーリズムである。

地域ぐるみの取り組みを期待

県内で実践者が増えはじめたことで、農村を開放し都市の人々と交流することに対する農家の人々の抵抗感も薄れてきた。今後は、(表2)のようにグリーンツーリズムを事業として地域ぐるみで取り組む段階を迎える。埋もれた資源を生かし、楽しい、魅力的な農村の暮らしを体験させる工夫がほしい。また、緑や水や土など自然とともにある住まい、生き方などを伝えていく事業にも取り組みたい。さらに、農村空間の景観を望ましいものにしていく必要がある。訪れる人が最初に感じるはその空間が醸し出す雰囲気、景観であるからである。雰囲気といえば漠然としているが、景観には住んでいる人々のすべてが表れる。みずばらしい景観の農村には心の貧しい人が住み、魅力的な景観の農村には魅力的な人々がいる。立ち寄りや途中下車など短期の旅行では農村の良さは分からない。滞在してじっくり味わい理解してもらうような仕掛けが必要になる。グリーンツーリズムには奥深い思想がある。本県のグリーンツーリズムはどうあるべきか、集落内で大いに語り合いたいものである。